

## 税金の申告制度について

学校法人灘育英会灘中学校 3 年

肥田木 悠太

私たち中学生にとって「税」という言葉は、まだ遠い存在のように思えます。普段の生活で身近に感じるのは、買い物をするときの消費税くらいです。しかし将来働くようになると、給料から税金が引かれる「源泉徴収」という制度があることを知りました。これをきっかけに、税の申告や納付について考えてみたいと思いました。

源泉徴収制度は、給与を受け取る人にとってとても便利な仕組みです。給料をもらう時に、予め所得税などが差し引かれて支払われるため、本人が税務署に行って計算したり、納付の手続きをしたりする必要がありません。また、税金の納めすぎや不足の計算も、年末調整といった手続きで簡易に済ますことが出来るのです。多くの人にとっては税金の納め忘れもなく、手間も省けるという点で合理的な制度です。特に、仕事に忙しい人にとっては大きな助けになると思います。

しかし、よく考えると税金の仕組みは本来、少し違う形で成り立っています。憲法で定められた「納税の義務」は、国民一人ひとりが自分の所得を計算し、それに応じた税額を申告して納めることを意味しています。つまり、源泉徴収は納税者本人の義務の一部を会社が代わりに行っているだけなのです。私たちが普段「勝手に引かれている」と思っている税金も、本来は自分で確認し、責任を持って納めるべきお金なのだと気づきました。

ここで考えなければならない問題は、源泉徴収制度に慣れてしまうと、自分がどれくらい税金を負担しているのかを意識しにくくなるという点です。実際に、税金の仕組みをよく理解しないまま大人になっている人も少なくないのではないのでしょうか。もし自分で申告をしていたら、「なぜこの金額なのか」「税金はどこに使われているのか」という疑問を自然に持つことができます。制度が便利である一方で、国民が税について学ぶ機会を失ってしまう危険もあるのだと思いました。

だからこそ、私たち中学生のうちから、税について学ぶことが大切だと思います。自分が社会の一員として、将来どれだけの税金を納め、どのように社会に貢献していくのかを考えることは、責任ある大人になるための第一歩です。源泉徴収のおかげで実務上の負担は軽くなっても、税の仕組みを理解する努力を怠ってはいけなと感じました。

将来、私が働くようになったときには、会社に任せきりにせず、自分が納めている税金の意味を理解できるようになりたいと思います。給与明細書に出てくる重要語句の内容や意味位は理解できるようになりたいと考えました。税の申告や納付を考えることは、単なる事務作業ではなく、社会の仕組みを支える責任を自覚することにつながります。中学生の今だからこそ、学ぶ機会を大切に、社会を支える一員として成長していきたいと強く感じました。